41期の４年間をふりかえって

41期　和泉憲昌

防大入校は1993年４月。経験者を中心に20人ほどが入部しました。

１年目の夏合宿は短距離が校内、長距離は黒姫高原でした。長距離は箱根駅伝が第70回記念大会のため、出場校が増えるということで、盛り上がっていましたが、我々１年生は、第80回記念大会へ向けて良い流れができるようにと38期生からの指導があり、毎週１回長距離１年生ミーティングを開いていました。しかし、実感がわかず、何をしてよいのやら・・・ミーティングは数回行われ、気がつけば消滅していました。

秋は関東理工系と箱根駅伝予選会が大きな大会でした。関東理工系では、やり投げで徳永が２位、800mで和泉が３位に入賞しました。この大会は、防大が主管校だったため、１年生は裏方の仕事も多くありました。また、部の目標とする大会ではありませんでしたが、関東学生新人で和泉が800mで３位に入賞しました。

94年は、進級するとすぐにカッター訓練が始まり、練習のできない日々が続きました。

オリンピック代表候補だったという日体大出身の伊藤２尉が短・中距離コーチに就任し、新入生では100mを10秒台で走った選手が２人加入したことで活気づきました。伊藤流の指導により、競技で勝つために何をすべきか、また、競技だけでなく、「疑うこと」など世の中を生き抜くにはどうするべきか、というようなことも多く学ばせていただきました。



第28回関東理工系大会４×400mR優勝

短・中距離の夏合宿は、校内で１ヶ月間、ほとんど休みなしで行われ、参加したのは、自分たち２年生と１年生ばかり。主力の３・４年生はほとんど来ないという状況で、このころから、陸上競技部は41期政権になりつつありました。

主な成績は、関東選手権と関東学生新人800mで２位に入った和泉が、この年の日本ランキング50傑に入る防大記録を出し、関東理工系は800mの大会記録を樹立しました。４×400mRも防大記録を何度か更新しました。

95年は、40期生の人数が少なかったため、41期生以下で盛り上げました。この年、平２曹が長距離コーチに就任し、長距離が活気づきました。初めて富士登山駅伝にも参加し、結果は71位。関東インカレではやり投げで徳永が５位、800mで和泉が７位。４×400mRは大躍進し、各種大会で３分20秒を切るタイムを連発し、関東理工系では大会新記録。800mでは和泉が防大記録を３回更新し、この年の日本ランキングが15位。やり投げの徳永も58m90で、新規格での防大記録を樹立しました。関東理工系は総合３位でした。

41期政権となった96年は、主将和泉、副将平間、外主務平野、内主務柵木、会計平宇が担当しました。来る者は拒まずという方針で、ジョガーを中心に部員がどんどん増えました。陸上部のホームページが立ち上がったのはこの年で、管理は柵木が行いました。



第45回記念勝田全国マラソン大会スタート前

800mの和泉は日本のトップ選手の出場する春期サーキットへ参戦し、全国を転戦。関東インカレでは柵木が400mで防大記録、和泉が800mで２位、徳永がやり投げで４位。日本学生選手権800mでは和泉が1’50”66の防大記録で優勝し全国タイトルを獲得、関東選手権1500mは防大記録で２位。長距離の富士登山駅伝は46位。関東学生新人では400mで和泉が防大記録、４×400mRでも３分17秒43の防大記録で５位に入賞。関東理工系は800m、1500mで和泉が優勝、４×400mRも優勝、400mで柵木が２位、やり投げで徳永が２位に入賞しましたが、総合は４位にとどまりました。長距離種目は、横須賀シーサイドマラソン５kmで和泉が優勝し、県の市町村対抗駅伝では横須賀市代表となりました。

41期は、ジョガーから競技者まで、幅広いレベルで活動し、人数の多い分、合宿は合同ではなくパート長の考えでそれぞれ行いました。パート間のコミュニケーションは和泉、柵木が、他のパートの練習に首を突っ込むことで成り立っていました。



全員の集合写真（卒業アルバムより）

41期の目標は、関東理工系大会と箱根駅伝予選会だけでなく、さらにその上を目指しました。その結果、それまでの防大記録を大きく上回る記録を多く残せましたが、強くなりたい人が練習をすればいいという方針で、総合力が高まらなかったのが残念でした。

最後に、2004年５月、平宇太郎くんがご逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

4年間を振り返って

42期　花田成壽

陸上競技部50年史がここに完成されたことを、42期一同心からお慶び申し上げます。

今振り返ってみると、我々42期生の最大の成果は、1年生以来の悲願であった関東理工系大会での「優勝」と箱根駅伝予選会での「防大歴代2位」の記録を出せたことだと思います。ただこの成果は、私達だけで成し遂げたものではなく、戸部部長を始めとした伊藤・大塚・泉山の歴代監督、岡部・平・工藤コーチ及び多くのOBの方のご指導と後輩達の協力なくしては成し遂げられなかったと思っています。また、同期は特に陸上競技という個人スポーツの中において短距離・中距離・長距離・投擲の各パート長が私の掲げたスローガン「楽しんで勝つ」をよく理解してくれ、決して馴れ合いになることなく、実行してくれたおかげだと思っています。私は、競技に対して皆が「楽しい、好き」と思える気持ちを常に持ち続ければ、必ず良い成果が出ると考えていました。どんなに辛くハードな練習の中でも、その「楽しい、好き」という気持ちを持つようにと、特に短距離パートの者には言い続けてきました。「部に行きたくない」、「競技をやりたくない」、「きついだけで楽しくない」という気持ちが生じれば決してどれほどよい指導者・施設に恵まれても結果は残せないと考えていました。古人は「好きこそものの上手なれ」といいましたがまさにそのとおりだと思います。だから私は、皆に陸上競技を、防大陸上部を好きになってほしいと思っていましたし、今でもその考えは変わりありません。

また、今振り返ってみると、42期生は優秀な人材が揃っていました。学生隊学生長2名（陸上：根本、航空：山口）を始め、ほとんどの者が長期勤務に就いていました。長期勤務に就いていなかったのは主将の私と副主将の津國の2名だけでした。(笑)

これらの者は部内において、その指導力を遺憾なく発揮し私をよく支えてくれました。私は主将として先頭になって部を運営した記憶はなく、宴会係による観音崎での海岸新入生歓迎会、合宿係による各パート合同での山形夏合宿、主務（内）による部外競技会への参加申請・走跳投歩の作成（表紙は私の直筆でしたが）、主務（外）による理工系大会の運営及びその他部の運営において同期が本当によく私を支えてくれたので、最後に有終の美を飾れたと思っています。その中でも、表舞台にはあまり出ませんでしたが副主将の津國は、私のことをよく理解してくれ、また支えてくれました。津國の支えなくしては42期の成果は成し遂げられなかったでしょう。津國ほど防大陸上部を愛した男はいないと思います。本当に感謝しています。

昨年教育のため同期が集い、中堅幹部としての資質を身につけるために富士学校へ行ってきましたが、やはり部の絆は固く、同期はもとより10期代の先輩から後輩まで富士地区周辺で集まれるもので、富士防大陸上部会を実施し陸上部の絆の強さと先輩の偉大さを感じるとともに、その後輩として恥じぬよう日々努力をしていきたいと感じました。また、なかなか機会には恵まれないとは思いますが防大陸上部の発展ために何らかの力になりたいと思っています。

最後に、防大陸上競技部の更なるご発展とご活躍を心より祈念いたします。また、大きな体と温厚な性格で我々を指導してくださいました大塚寿夫前監督と、無口ながら我々にいつも優しく接して下さいました41期長距離パートの平宇太郎先輩のご冥福を42期一同心からお祈りしています。









43期主将として

43期　堀田朗伸

防大を卒業して、6年の歳月が流れた。いつの間にか、防大の4年間よりも長い月日が流れてしまった。まだまだバリバリのつもりが、現役時代には筋肉が隆々としていた足も、今ではその面影が失せてしまった。このままでは駄目だと、ジョギングをしなければと思うけど、思っているだけでなかなか実行に移せないでいる自分が非常にもどかしい。

先日、妻を連れて久し振りに防大を訪問した。グランドは、自分達が目標に向かって走っていたときと何も変わってなかった。当時にタイムスリップしたような気がした。懐かしい恩師や先輩の顔、兄弟のようにかわいがった後輩の顔が浮かんできた。

残念ながら、我が43期は部員と呼べる者が自分と数名しかいなかったが、先輩方から受け継いだ「関東理工系大会総合優勝」と「箱根予選20位以内」を目標に日々厳しい練習に励んだ。夏の炎天下の中、冬の雪の降る中、雨の激しい中、毎日走り続けた。いつの間にか、部活で走っているときが一番充実した時間になっていた。

一年間の部活動の中で一番充実して集中した練習が出来たのは夏合宿だった。毎年、短距離は学校で、長距離は違う場所で合宿を実施し、部としてまとまった行動をとってなかったが、3年の夏に初めて、部としてまとまった合宿を山形の神町駐屯地を拠点として実施した。駐屯地近傍の陸上競技場と蔵王のクロスカントリーコースを使用しての集中練習だった。このときは42期の先輩方のリーダーシップのもと、部としての結束感が非常に強く、部の雰囲気は非常に良い方向に向いていた。その結果、部としての目標である「関東理工系大会総合優勝」を修める事が出来た。我々が4年になったときも、その流れを継承すべきだったが、いろいろな理由により結局またもとの常態に戻してしまった。今から思えば、主将である自分が強制力をもっと発揮して、全員を連れて行くべきだったと後悔している。そうすればこの夏合宿が陸上部の一年間の中での大きなイベントとして今でも受け継がれていたかもしれない。そういう意味でも2回目の我々の年が一番重要であった。

我々43期の残した成績は、「関東理工系大会第3位」だった。リーダーシップをとるべき4年生が殆ど部活動に参加せず、チームを良い方向に導く事が出来なかった事が一番の原因だと思う。

部活動の中で自分自身の為になった事は、主将に就任したことにより旺盛な責任感を持ち続ける事が出来た事、先輩・後輩との切磋琢磨により自分自身の心身に磨きをかけられた事、これらすばらしい人達との出会いにより生涯の友を得る事が出来た事である。



44期陸上部　代表挨拶

44期　秋山洋三

防衛大学校を卒業して、もうすぐ5年が経とうとしています。年齢的にも20代後半へ突入し、仕事においてもプライベートにおいてもこれからの人生の基礎固めをする上で最も重要な時期ではないでしょうか。なかなか連絡を密にすることは困難ですが、44期一人一人が陸・海・空自衛隊または一般の会社において、それぞれの道をそれぞれの目標に向かって邁進していることでしょう。余談ですが、聞くところによると同期の半数以上が結婚しているということで、時間の流れを感じるとともに、大いに焦りを感じているのも正直なところです。

さて、現在初級幹部として部隊勤務に励んでいるわけですが、最近特に防大のつながり、陸上部のつながりというものを強く感じるようになりました。前に連絡を密にすることが年々難しくなっていると言いましたが、自衛隊というのは広いようで狭いものでわずか数年の自衛隊生活ですが、小原台で同じ時間を過ごした方を含め多くの諸先輩の方々と訓練の先々で出会うことができました。つい先日もある演習場における訓練において、それぞれ他職種の方ではありますが、二人の先輩と一緒に仕事をする機会がありました。また、ある課程へ入校したときも、何人かの先輩とお会いすることができ、いろいろとお話を聞くことができました。時期の違いはあれ、同じ場所・同じ環境・同じクラブで4年間を過ごしたものだけが共有できるものがあるのだなとしみじみ感じました。

これからも小原台で過ごした4年間の重みを感じつつ、これから先もあるであろう多くの出会いを大切にしながら日々精進を重ねていきたいと思います。まだまだ未熟ではありますが、44期一同これからもどうぞよろしくお願い致します。また、これからは後輩のみんなと会う機会もあると思います。そのときまでに少しでも頼りがいのある先輩になれるように真面目に勤務に励んでいきたいと思います。最後になりましたが益々の皆様のご活躍とご家族のご多幸を祈念して挨拶にかえさせていただきます。



坂田と佐野は結局どっちが勝ったの？

45期　野田哲徳

防大陸上部50周年おめでとうございます。45期主将として当時の記憶を振り返ってみたいと思います。私達の期は、先輩方のお陰もありまして非常に練習に打ち込みやすい環境の中で３年間過ごすことが出来たと思います。

私達が最高学年になった時は、短距離の中島、中距離の嘉藤、長距離の伊藤、投擲の川口等、各パートに柱がいましたので、彼らを核心として練習に励むことが出来ました。また、それ以外にも全体的なパフォーマンスレベルや競技に対する意識が高い者ばかりで、とても同期に恵まれていたように思います。逆に、私個人としては、一選手としての言動が強く、今思うと後悔することが多く、主将という立場を理解していなかったと反省しています。

成績は多くの人の支えもありまして、チームとしては関東理工系２連覇達成や箱根予選会の健闘、個人でも多くの者が歴代10傑に記録を残し、また自己ベストを大幅に更新する等、全般的に満足できる結果だったと思います。その分、練習は厳しく自己の限界を求めました。毎日の練習が意地の張り合いで１本１本スタート前は緊張していました。また、走り終えた後、トラックに悶えて倒れこむことが多々ありましたが、それが異様に気持ちよく充実感を味わっていたのを覚えています。また、試合や練習においても数々の名勝負があり、メリハリのきいた毎日でした。（坂田と佐野は結局どっちが勝ったの？）

とにかく、元気というか負けん気というか、競走馬（サラブレッドではありませんでしたが）のようなメンバーの集まりで、一言で説明するのは難しいですが、「つべこべ言う前に、まず走れ」みたいな感じで、最高の雰囲気の中で、最高の練習が出来たと今でも胸を張って言えます。それと同時に、４年間お世話になりました部長、OBや監督・顧問の皆様、先輩・後輩にはとても感謝しております。今後は陸上部の更なる発展の為にOBとして貢献していきたいと思っております。



理工系３連覇までの道のり

46期　吉村尚輝

まずは、防大陸上部50周年おめでとうございます。諸先輩方の良き伝統、ご指導・ご支援と後輩たちのがんばりによりこうして50年を迎えることができますことを誇りに思います。46期主将として私たちの在学中の想い出について掲載させて頂こうと思います。私たち46期政権のころの想い出と言えばやはり理工系大会３連覇です。

１年生の時はあと１歩というところで優勝を逃し準優勝でした。次の年は、先輩方の活躍で見事優勝を取り戻し次の年も優勝と２連覇を遂げました。女子の部でも２年連続準優勝という優秀な成績を挙げました。特に２連覇目は幹事校としての優勝であり、選手はもちろんですがそれ以外での活躍があってのことだと思います。そして、安心しているのもつかの間いよいよ私たち46期政権の出番となったわけです。45期政権時の主力メンバーは４年生が多かったので少々不安でした。その不安を解消するのはやはり練習と結果です。そして力のある後輩にも恵まれました。監督・コーチのアドバイスにより科学的な方法を取り入れたり、その他のいろいろな練習方法を取り入れたりと１年間がんばっていきました。特に最後の追い込みとなる夏合宿は毎年恒例となっていた山形で行いました。この合宿でみんなの３連覇に向かう意思統一もなされ、さらにはその後の各種記録会等で結果を残し実力もついてきました。そしていよいよ本番。初日まずまずのスタート。しかしなかなかうまくはいかずとれるはずの種目で失敗等がありいやなムードも流れました。

そのいやなムードを吹き飛ばすがごとく本番に力を発揮し入賞を重ね、みんなでサポートしていき大会を進めていきました。そしていよいよ結果です。なんとほんの総合得点数点差で優勝。見事３連覇を達成することができました。更に、少数精鋭女子の部でも優勝。見事、初となるアベック優勝も勝ち取りました。これは一人一人の最後まであきらめない気持ちと、部に対する誇りがあったからだと思います。そして、１年前の理工系が終わったその時から始まった幹事校としての仕事。これはとても大変で理工系大会運営に大きく貢献しました。そしてたくさんの先輩方の応援も一人一人に届き大きな力となりました。全てが一つになりみんなで勝ち取った３連覇＆優勝だったと思います。こうして防大陸上部50年の歴史の１ページに残せることを光栄に思います。今後とも防大陸上部のますますのご健勝・ご発展を心からお祈り致します。



悔しさと喜び

47期　上野和彦

我々47期が４学年時に防衛大学校は開校50周年の時を迎えました。政権を握る47期としましても、気持ちを引き締め直し、新入部員等も多く獲得できるよう動き回り、今まで諸先輩方が築き上げてこられた伝統を継承し、さらには防衛大学校陸上部の新たな歴史が創れるようにと動き出しました。我々47期は先輩方の意志を引き継ぎ、「関東理工系大会優勝」「箱根駅伝出場」の２つを目標に活動しました。特に関東理工系大会においては、44期政権から46期政権まで３連覇を達成しており、我々47期は関東理工系大会に関しては３学年時まで負けを知らず、４連覇がかかっていました。続々と入賞者を出し、点数を重ねましたが力及ばず総合４連覇は逃してしまいました。

この関東理工系大会での敗退を胸に決意を新たにして、箱根駅伝予選会に部員全員気持ちを一つにして臨みました。その箱根駅伝に関しましては、平成15年から関東学連選抜というチームが取り入れられるということで、チームとして本戦出場を果たせなかったとしても、一人でも多くの箱根駅伝走者を出そうということで陸上競技部一丸となって取り組みました。結果として皆さんご存じの通り48期の岡本英伯学生が見事出場を果たすことができました。箱根駅伝当日も学生を中心としてバックアップ体制を整え、復路６区の山下りでしたが日頃の練習の成果を十分に発揮してくれて、力強い走りをしてくれました。日頃からOBの方々には多大なるご支援をいただいておりますが、この箱根駅伝出場の機にはさらなるご支援をいただきまして、誠に感謝しております。このように、47期は関東理工系大会での悔しさと箱根駅伝での喜びを同時に経験しました。これからはOBとして、微力ではありますが、後輩が再び関東理工系大会での優勝を勝ち取り、そして箱根駅伝に１人や２人でなく、防衛大学校という単独チームで出場できるよう支えていきたいと思います。



箱根の思い出

48期　八幡　勲

50年史と言うことで、48期主将として文面を依頼されたが、何を書こうか迷った末、箱根駅伝の思い出を書くことにした。現役時代、短距離・跳躍パートだった私の思い出がなぜ箱根駅伝かというと、私が３年の時、同期の岡本学生が関東選抜として箱根駅伝に出場したからだ。

私は駅伝当日、箱根まで応援に行き、沿道で岡本に声援を送った。毎年、正月は実家で箱根駅伝をテレビで見ていたのに、沿道でチームメイトに声援を送っているのが不思議だった。岡本学生の走りは、関東選抜の名に恥じないすばらしい走りだった。

岡本学生の走りもすばらしい思い出だが、私が思い出に残ったことはもう一つある。それは、各大学の箱根駅伝に対する思いである。優勝を狙う大学、シード権を狙う大学、自分の大学のたすきを最後まで繋ごうとする大学、大学毎でそれぞれ目的は違うが、一つの目標に対して取り組む姿勢はどの大学も見習うべき点が多々あった。

選手が試合に集中できるように、周りがサポートしていた。しかし、防大陸上部は各パート間の連携がうまくとれていなかった。他大学は各パートの人数が多いため、その中で全てやればいいが、防大陸上部は人数が少ないため、陸上部としてまとまらなければいけない。特に箱根の予選会は長距離パートが走りに専念できるように、他のパートが協力しなければ良い結果は出ないと感じた。

私が主将になってからは、各パート間のつながりを重視した。箱根の予選会では、陸上部全体で長距離パートをバックアップした。48期の箱根予選会は、結果はともかく予選会に対する思いは他大学に負けていなかったと言える。私も、最後の同期の走りを応援したかったが、それよりも万全の状態で気持ちよく走れるように、補助として選手をバックアップした。

残念ながら、最後の箱根で岡本学生は選抜に選ばれなかったが、３年の時沿道で応援した箱根駅伝の時以上に、最後の箱根予選会が心に深く残っている。



団体競技としての陸上競技

49期　小野寺　賢　治

「陸上競技と言えば個人競技であることが良く知られていると思いますが、団体競技のような特性も持ち合わせております」。この言葉は私が入部した当初の部会で、現部長の戸部先生がおっしゃった言葉です。私は高校から陸上競技を始めましたが、高校時代はもとより、防大に入校した当初も、団体競技としての陸上競技と言う意味を理解することはできませんでした。ところが学年を重ねるうちに、その考えは大きく変わっていきました。そのきっかけとなったのが、現在陸上競技部の主要大会の１つである関東理工系大会です。関東理工系大会では、個人の入賞はもとより学校対抗の部でも毎年優勝を狙っています。私が１学年時の関東理工系大会では、３連覇がかかっていた試合でした。最終種目のマイルリレーで予選の通り走れば、学校対抗の部の優勝はほぼ確実という状況で、２走がバトンを落とすと言うハプニングが生じました。それまでトップ集団にいた防大が一気に最下位に落ちそうになりました。そのとき、バトンを落とした選手が素早くバトンを拾い、猛烈な勢いで前を行く選手を追走し、あれだけ差のあった７位の選手を抜き、最下位から７位に上がりました。その後も、３・４走の奮闘により見事６位入賞を果たすことができました。同時並行していたフィールド競技、それまでの得点を合わせた結果、防大は３連覇を成し遂げることができました。そのリレーが終わったあと、私は初めて「団体競技としての陸上競技」と言う意味を理解することができました。これは何もレースに限ったことではありません。日頃の練習、大会前の互いの気配り、サポート、その他全てにおいてこのような要素が含まれていたのです。陸上競技は決して一人でやることはできません。一人で練習しているつもりでも、必ずそれを支えてくれる人が存在するのです。そういう意味でも団体競技なのです。私は49期主将という大役を仰せつかり、どのような陸上部を作るかと考えたときに、まずそれが浮かびました。もし自分にとっての陸上競技とは何かと問われたとき、私は迷わずこう答えます。「全員陸上　防大陸上競技部」これが私の陸上競技です。



寄稿

創立50周年に寄せて

スピリットのある男（防大時代の尾辻秀久）

４期主将　冨　澤　　暉

昭和34年春、防衛大学校の武道場で新入生に対するクラブ活動説明会（各部勧誘会）があった。陸上部主将になったばかりの私は熱弁をふるったつもりであったが、終わったあと私の前に現れた一年生はたった一人であった。それが防衛大学校第７期生の尾辻秀久である。色あさ黒く短躯、みるからに負けん気の強そうな目付きで「鹿児島・玉龍高校で走っていました。入部させて下さい」と言ったように思う。

尾辻は頼りになる男であった。素人出身のアスリートが多く関東大学第２部で下位を低迷していたわが部の中では、彼は何といっても強力選手であった。専門は当時中距離といっていた400・800だったが、1500でも5000でも、またいざとなれば400リレーの100でも担当しうるオールラウンドランナーで、神奈川六大学対抗などではピカイチのポイントゲッターであった。性格は明るく、何をやっても敏捷で器用な事この上なし、運動部の選手が自分の専門外で出場できる校内競技会ではサッカー選手として参加し、ミラクルシュートを放って「やんや」の喝采を博したこともある。度胸がよくてチャンスに活躍、「華」のある尾辻でもあった。

ある競技会に参加した時、尾辻のスパイクが壊れて使えなくなったことがある。彼の足は小さく仲間の物では合わないので、仕方なくキャプテンの私が同じグラウンドにいた女子高チームのところへ行き、女の子のスパイクを借りてやった。彼はその借り物で大活躍し競技後には自ら颯爽とスパイクを返しにいったが、それをきっかけに、そのスパイクの持ち主と仲良くなり、仲間達を大いに羨ましがらせたものである。ヤンチャで皆に愛され、女にももてる男だったのである。

防大陸上部が箱根駅伝に出場したのは昭和36年と38年のたった２回限りのことだが、その36年の大会で第１区すなわち読売新聞社前からのスタートを走ったのも尾辻であった。このレースばかりは実力のほど如何ともなしがたく敗れたが、今となってみれば、彼は防大生で最初に箱根駅伝を走るという幸運の星をも持っていたのである。

その尾辻が防大をやめると言った時、私は反対した。防大のキャンパス内で彼の母堂に一度だけだがお会いしたことがあった。とても若々しく優しさにあふれたひとであった。そして彼の父君が海軍の艦長でとうに戦死されていたこともよく知っていたのである。

尾辻が防大からいなくなって暫く、彼の消息を聞くことはなかったが、防大陸上部のOB会では彼のことがいつも懐かしく語られた。我々にとって彼は忘れ得ぬ人物であった。

そのうちに彼が東大に入ったという噂を聞いた。防大ではそれほどの秀才とは聞いていなかったので、「ほう」と感嘆詞を発したが、「彼の気の強さと集中力をもってすればそれくらいのことはやるだろう」と思ったものである。そして年を経てある日、彼が県会議員になったという話を聞いた。また「ほう」と声を出したが、今度は「成る程」と思った。「彼には政治家が向いている」そう思った。彼はとても魅力的で、何か強烈なスピリットを感じさせる男なのだ。

陸上競技部の先輩としては、引き続き「おい尾辻」と呼びすてにするつもりだが、そのうちどこかで「尾辻先生」と呼ぶことになるのだろうか、是非そう呼んでみたいものである。

昨秋、尾辻君（７期）が厚生大臣になった。陸上競技部と大臣誕生とは関係のないことだが、我らが仲間から大臣が出たことを、素直に、共に喜びたい。

この文章は今から20年ほど前、尾辻君が鹿児島県会議員から初の国政選挙（衆院）に出馬しようとした時に、彼の秘書から頼まれて書いたものである。無論これは、集票には役立たなかったのであろう、その時、彼は見事落選した。その後、彼は遺族会を背景に参院選に３回当選、この度ついに大臣の座を得たのである。